

ふるさとの民話 (第三十話)

『石火矢米蔵(いしびやよねぞう)
関の話』

幕末から、明治初期にかけて、江曾档(あて)が、柱木に最も適しているということで、

好んで用いられました。遠方からも、木材商人が訪れました。村の人たち

の大半が、木材の挽(ひき)出しや荷車引きなどで働いていました。

そして、娯楽といえば、草相撲をみたり、毎年、秋のうら祭りに、盤持ち大会や俵担ぎなど、力自慢を競い合うことでした。そんなとき、江曾に、一人の若者が、めきめきと力をつけ、立派に成長していきました。

村では、春の苗代(なわしろ)時に、思い石を引き回しながら、田の土を柔らかくする風習がありました。そんなとき、若者は、力強さを発揮し、村の人たちから、たいへん喜ばれたそうです。この人こそが、後の「石火矢米蔵関」という人でした。この村では、知らない者がいないくらい、強いお相撲さんでした。

ある年、降り続いた長雨のため、林道や橋桁が崩れ落ち、復旧の見通しが、全く、立たないくらいの被害が出ました。せっかく、挽き出した木材が、山から運び出せなくなったのです。木材商人たちは、もちろん、林業に従事していた人々も、困ってしまいました。そこで、思いついたのが、水の量が少し退いた頃、川を利用して、七尾まで、木材を運ぼうということでした。

人夫たちは、木材を、次々と、川へ流し、八幡の川まで来ました。(その頃の川は、今と違い、浅くて堤防も丈夫ではありませんでした。)八幡の村の人たちは、これを見て、いったい、何事が起きたのかと、大勢、集まってきました。そして、「こんなことをして、もし、堤防がきれたら、どうしてくれる。」と、木材の行く手を塞いでしまいました。江曾の人たちは、この窮状を説明して、何とか通してもらいたいと頼みましたが、受け付けてもらえず、困り果てていました。

この話を聞いた「石火矢関」は、さっそく、八幡の村の人たちに会い、「私に免じて、この場は、なんとか、通してもらえないか。」と、三拝九拝の末、自分が責任を負うという、厳しい条件付きで、ようやく、許しを得ました。そして、無事に、七尾まで、木材を運ぶことができたそうです。

「石火矢関」の没後、村の人たちは、この功績に感謝し、旧道の能登坂(のとさか)入り口に、石碑を建てました。そして、この功績を忍ぶと共に、日夜、災害から守ってもらったそうです。その当時、盤持ち大会に使った石は、今でも、白山神社に保存されています。

(江曾町 山田 利久氏の話)

